馬氏缺雅全

島尾敏雄全集 第6巻

一九八一年一月二五日発行

著者 島尾敏雄
発行者 株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)
振替東京六-六二七九九
堀内印刷・美行製本
© 1981 Toshio Shimao
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島尾敏雄全集

第6巻

島尾敏雄全雄第6巻・目次

島へ　7
マヤと一緒に　40
頑な今日　69
捜妻記　94
集会のあとで　109
思屑録　128
頃日のつとめ　143
市壁の町なかで　159
接触　177
オールド・ノース・ブリッジの一片　209
出孤島記　234

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

出発は遂に訪れず　332
その夏の今は　292

ブックデザイン　平野甲賀

島へ

島に上陸して白い道を歩いたが何も見えない。船の上から眺めたときも何も見えなかった。何も、と言ったが、洋上に位置を占める以上、島自体の存在があり、岡があり谷があり、草木が生え、珊瑚礁の泊が認められないわけはないが、でも私は何も見えないという気持を抱いた。たぶんそれは、人間臭い人工的な構造物が見えなかっただけだ。それなのに何も見えないと感じた。その日妻は紫がかった着物を裾長に着て、裾をひきずっているように見えた。着物の着付がどこかおかしく、着物を着ているというよりはきぬをまとっているぐあいだ。帯の位置が高く、腕と腰のあたりにしわがかたまった。でもそれはどこかのそういう着付を再現しているのかもわからない。私は妻の着付に不釣合を覚えながら、彼女の背景の歳月の重さを考えている。もし着物でなく、別な衣裳の何かであれば、島の風物に映え、彼女自身をも美しくしただろう。しかしその違和感には別な感情も含まれていた。彼女の装う衣裳は私の皮膚にはりついてくる。

何かにいざなわれ、私たちはときおり島に渡った。本土の都会の港から焼玉機関の小さな連絡船に

乗って出発すると、奥深く入りこんだ湾内の両岸に、歩行の程度ではどこまでも続く大地の横たわりの重なりが予想され、ほかの人にゆだねた単調な安定がある。行き交う美装された豪華船が海の上をすべるように移動し、その背景には、海辺に点綴された人間の営みの根拠が確かな根を据えているのがうかがわれる。ところで、連絡船の方は、見た目にみすぼらしく、わずかな波浪にもあえぎ、顔ぶれの変らぬ乗客が、においの悪い狭い船室で死人のように眠っている。やがて本土の辺端を遠ざかると、波がもりあがってきてすぐにそれを見失う。船が小さいせいか、別な場所に移り行く気持は起らないで、海の奥の方に、下って行くとしか思えない。船長は、船を操舵手にまかせきりにし、脇部屋の丸椅子の上であぐらをかきながら、携帯ラジオを耳にあて目を細めてきき入ったままだ。

だが島影は見えてくる。幾つかの島が寄り集っていて、それぞれの名前があるにちがいないが、それを私は知らない。島の白砂や、生えている樹木がはっきり見えるあたりに近づいても、船のゆれ動きは定まらず、なま酔いの気分で、もういつのころからかはわからぬが、これらの島についてききかじっていたかんたんな知識が、思わぬ的確さをもって島のそれぞれを言いつくし、個性づけているのを知って、ふしぎな気持がする。あやうげに耳にとどめていたうわさが、ひとつひとつ、目のまえでその通りになる。でも、どの島にも人の住む気配の稀薄なことが、いぶかしい。キャンプの敷地に探し出せるほどの人臭さが、接岸して水路をあとづけながらゆれ進む船の上から感じとれる。目の前をよぎって流れ去る物体が、奥の方に見えない部分をひそませながら自分自身を展開して行く、島の不毛のすがたは、ちょうど行き交う幽霊船を外からうかがった場合の甲板上の細部に似ている。そこに在ったはずの人々の影が、潮にさらされた板やマストや鉄鎖、そして風にはためく破れ布をなお執拗

に支配しているように、白い砂浜や錯綜した樹木、浸蝕された岩肌に、さだかでないにんげんらしい気配の影が、吸収されている。

水道を縫って行くと、ひとつの島が次のものと交替し、島のあいだは望み見ることができるほどの距離だが、それを結ぶ便船はないという。もし一方からほかの島に渡ろうとするなら、つい目の先に見えても、島々と本土とを結ぶただ一つのこの燒玉機関の連絡船の往復を利用するしかない。

島は、砂丘状のもの、くさった虫歯に似たもの、なだらかな高さとそれを覆う生い茂った樹木がうずくまったけだものを思わせるものなど、それぞれの形状を持っていて、とぎれがちに伝わり広がって行く個別的な言い伝えに、あてはまろうとしているように見える。私は、その一つの、ほかの島々にくらべてことのほか海岸線の出入りの多いことが目立つ島の、北風をさけ港口を南にひらいてするどく切れこんだ狭い入江の奥に、重なり合いつつへばりついているひとかたまりの木造家屋に目をひきつけられた。どんな場所にでも、人々の居住がそれぞれの地形に固着して築かれているのを見ると、私はいち早くその区域を脱れようとする気持の起るのがおさえられない。そこにくり広げられている生活は、映写幕の上では確かに存在しながら一瞬にして永遠に過ぎ去ってしまう選ばれた輝かしい映画の中の生活のように私の介入を拒否している。海端は崖と石垣で人工的にかためられ、切り立った壁に海水が押しよせ、ふくれ上り、人家は石垣の一部分ででもあるかのように、交錯して組立てられ、方角によっては城砦とも見え、或いは浮城のようにも眺められた。目をこらすと家屋の凝集のあいだを、狭いが川床の深い川が切れこんでいるので、本土の峡谷の温泉町に似た角度のあることにも気がつく。そこに生を享けないかぎり、ここの住人にはなれず、その居住のたたずまいは、私のこころの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

かどをけずりとって、やがて見えなくなる。

群れよった島々をはなれてふたたび海洋のただ中に出たときに、行かなければならぬ島は、まだ先の方だということを納得する。それはただ一つ洋上に位置を占めているが、その先の方にもなお孤立した一層小さな島が浮んでいるので、連絡船が本土を見失ったあとに辿りはじめるこれらの島々の並びは、頭の中に画いた地図の中では冷たくにぎわっている。

連絡船から、細長い小さな島舟に乗り移り、泊の水路を縫いながら私たちは上陸した。私は妻の手をひき、南の風になぶられて、多少は海水にひざをひたして白浜を上って来たように思う。白砂は、降りつもった雪かと錯覚させられたほど、あたりの音響を吸収した静けさがあった。海岸線の出入りのほとんどない、紡錘かイカの骨を思わせる単調な恰好の島ながら、あきらかに、その存在は海を切りさき、海はそのために傷ついて、島のあとさきで白い腹部を裏返している。その痛みは、認めるには小さ過ぎるこの島にもその分け前を与えずにはおかない。海の肌を南側から受ける部分と、北で受けている部分は、地形が一つの島とは思えぬほど変っていて、別の側に根を据えたそれぞれの部落は、お互いを補い合うふうだ。

私と妻は町のようになった大きな部落が目当てだったとかえりみられる。この島のどこかに安息の場所があるようなのに、島に来てその場所をさがそうとすると、逃げ水のようにその所在があやふやになってしまう。部落のどの家もかたく入口を閉ざし、外からのものをはじき返す。中央を貫通するただ一本の周島道路を廻って部落の入口に取りつくとすぐ反対のはずれに出てしまい、中の様子はつ

かまえようがない。同じ道をもう一度ひき返すことが、どうしてか気易く行なえず、誰も見張りをしているわけではないが、首筋が固く凝って、通って来た部落の中をふり返って見ることもできない。通り過ぎた限りでは、部落のなか深くはいって行く小路はどこにも見当らなかった。道路の両わきには珊瑚石灰岩を城壁のように積み上げた家々の囲いがずっとつづいていて、人のすがたを見つけだすことはできない。石垣の高さが目の位置を越えているので、どうなっているかわからないが、開放された、でも島外者には閉ざされた中心の広場で、人々が笑い声をたてているような、にぎやかなざわめきが、耳にではなく皮膚に感じられた。どこかに中の様子がうかがえる誘いの小道でも見つからないかと、緊張しつづけたが、効果は空しく、私たちの背後では、はじけるような笑い声が部落の上空に広がり散ったと錯覚した。どの部落も、その中を通りぬけるときはその内部を深くかくしたままふくれあがって私を圧迫したが、通りぬけると、すべてが稀薄に背を低くしてしまい、記憶から脱落しようとする何かへんなはたらきが生ずる。

私と妻は東の突端のあたりから島の北側の方に歩いて行った。この島が南西から北東の向きに、くさびを打ちこむようにつきささっていることに、どんな理由があるかはわからない。だからその先端の方は末すぼまりに細身になり、つかまえどころのない広くておそろしい海に向って、せいいっぱい抵抗しているようだ。そしてそちらに向って歩いて行くと、言い知れぬ寂しさに襲われた。

道の右側には、タイワンアダンゲの株が、先のとがった肉の厚い葉を放射のかたちに広げて並んでいた。葉はおだやかな水色のエナメルをかためたように見え、葉の先のかたいとげで幅の広い部分を傷つけると、茶褐色の痕跡があとあとまで消えずに残り、ところどころいたずら書きがしてあった。

私の目はタイワンアダンゲの葉末越しに、浸蝕されて気孔だらけのいぼいぼになった黒い石灰岩が、上陸者をそこのところで阻む頑固な姿勢で、渚のあたり一帯にへばりついているのを見ている。岩礁の上には青のりの付着した部分もあり、遠目には広い庭園の人工的な芝生をながめる気分にさせられる。なおその先の環礁にさえぎられて白く波立つ地帯が、道路に並行して受苦の円光のように島をとりまいているが、それらはみな目の高さと水平のあたりで知覚され、突兀とそびえた山塊や、はるか雲際のあたりに白雪をまとって連なった峯、或いは人工の建築物によって視野をさえぎられることはない。島自体に高さはなく、雲はまといつく対象を見つけ得ずに荒々しく散ってしまい、心もちふくらんだ中高の島の面を片方から反対の方に、そのあおりを受けて海の上を渡る風が破れ笛のようなきしりを放出しながら、なでさすり行き来することをやめない。島はぐるりからはい上がる海の湿気に濡れているのに、休息のない風のためにそれは吹きとばされてしまう。

道の左側は、砂糖きびの株が林のようにつづいていた。きびの株の間隔がせまく、葉が重なり合って、中の方はよく見えないが、気のせいか、にぎやかな動きのある気配があった。何人かがつらなって歩き廻っているような音がきこえてくるように思えた。きっと密生したきびの株を、防潮と防風のそしてまた外部からの目を防ぐたてにして、その内側に小中学校の運動場が設けられているにちがいない。その子どもたちが教師に導かれ、大地を音立ててふまえながら歩き廻っているとしか思えない。島で子どもたちを見かけると、明るい陽ざしの中でかげりがちのまぶたが、ほどけてくるのは事実だ。でも子どもはどことなく特権の表情をちらつかせて、押しつけがましい顔付を示した。その顔を見ると、私は胸もとのむかついてくるのが、われながらわからない。だからたぶん、きび畑の向うの子ど

もたちは横着に教師に責任をもたせかけて、疲労の顔色をかくさずに、おざなりの行進をしているだろう。できるならそれらを見たくないと思っていると、いきなり、きびの株が左右にさわがしく横倒しになって、一列の隊伍を組んだ子どもたちが、道路の私たちの方に向って進んで来た。

うしろから目に見えぬ力で押し出されてくるように、子どもたちは、なかば気が進まずにからだを反ってもたれかかり、それをうしろの者が支えながら仕方なく押して出る構えで、あごを深い仰角にしたまま私たちの方を見ようとするので、眼球が目の中央にすわり、偏執者の顔付になって近づいて来た。その目付に先ず気持を奪われた。最初ほかの部分はぼやけていたが、彼らはみんな下半身が素はだかだ。少年も少女も、ゆるやかな半袖の上衣をまとっているだけで、下の構えがない。相手に何かをつきつけるためにやって来るふうに、まっすぐにつきささる親密なものと、手さぐりで近づいてくる敵対の感情がいっしょになって私たちを襲い、私はショックを受けた。自分をそこに投げ出して彼らの側にまぎれこんでしまいたい願いが、理不尽につきあげてきておさえられぬが、それを遂行することは不可能なだけでなく、その願望そのものがゆがんでいるのではないかというおそれも取りのぞけない。そのためすべてをまともに見ることができず、伏目がちになったが、するといっそう彼らのはだかの輪郭が強い太さをもちはじめ、私を圧倒しにかかる。原初のエネルギーが、陽にこげた褐色の顔の中から、ならびのいい白い歯を見せて、私のあやふやな立場を根こそぎつき崩しに来たのかと思ってしまう。私は虚脱し、のがれようとする。子どもらは私のおびえが理解できないが、ただ彼らの後尾に歩調を合わせるようにくっつきながら子どもらを押し出すようにからだを前方に傾けていた教師が、頬のすみに皮肉な笑いをただよわせているのが認められた。彼がそこで享有している立場

に私はあずかれないという考えが、また私の腰を浮かせてしまい、妻をうながして、彼らに向いていた方向を変え、白い道を歩き出した。確かに目の中にあった現前の光景が消失すると、ふくれた部分が目の底であざやかになり、追いうちをかけるぐあいに私の生存にすがりついてくる。皮膚を通してしみわたってくるひりひりした快さとともに、近づかずによかった、とささやく針の降るような音が耳の根のところにつきささる。もう見えなくなった子どもらの目の、ことさらに黒々と大きいこと、唇が水をふくんだ朱色であったことが、その特徴をいっそう際立たせてきた。

さいわいに、あとも追われず、二人はどんどん道を急いだが、タイワンアダンゲの並木が、いつソテツに変ったのか気がつかなかった。それはまたいつか再びタイワンアダンゲにもどり、また交錯しながら、その葉末を越して或いは葉がくれに、環礁のところで白く泡立っている海の気配に取りつかれていたことに変りはない。

島の北の部落は、はいったと思うと出てしまい、どこのところで道をそれたか、私と妻は、いつのまにかなぎさを歩いていた。出入りのない単調な海岸線なのに、視界が思いのほか狭い。浸触孔だらけの黒い珊瑚石灰岩がじゃまをして視線はそこでつかえてしまう。道の方から遠望していたときのひらたい感じがなくなり、人間のからだが人工的な巨石のあいだに沈んでしまうようだ。人工的な、と感じられるせせこましい展望の中で、私たちはパノラマの中のでく人形のように歩いた。黒い岩は、蝕れると皮膚をひき裂くとがった刺をいっぱいもっているのにひきかえ、なぎさの砂は白くさらされ、粘土質はふくんでいないので、そこに在るものをすべてはじき返しているように見える。岩はかりそめにそこに運ばれてきて、やがてまた位置を移すことが予定されてでもいるかのように、不安定な様

子を示していた。
歩きにくい白砂をふみつけ、岩を左右に巻きながら進んで行ったが、やや傾いた太陽ながら、暑気はいっそう幅広く地上を包みこみ、後頭部をしびれさせた。疲労を感ずると、自分以外の者とともに行動することにいらだちが生じ、それはおそらく同行者の妻の方でも同じことにちがいない。
見通しがきかぬから、島のどの部分に廻ったか見当を失い、どこを目あてにしてたどりつこうとしているのかも、あやしくなった。
やがて砂浜が切れ、くちばしのように平たくつき出た小さな岬に出た。土地にしがみついたしぶといつる草が一面に生えていて、緑色の部分と、さびたあかねに似た色の部分が縞模様になり、足下にふめばこわばった固さがあったが、遠い目で見渡すと、やわらかな芝生でしきつめられた庭園のようだ。岬の土地のふくらみでその向うの海は見えなかった。
私は岬の突端の、地図で見た未測定のところを思い出し、そこに行ってみようと言うと、妻は眉をしかめて返事をした。
「およしなさい、あぶないから」
うかつなことだが、妻はにこにこ笑って私に賛成してくれるものと予期していた。
「あなたは島のことはなんにも知らないわ。島のひとは誰もそこには行かないのよ。そんなところにわざわざ行くことはないわ」
と唇をとがらせたみにくい顔をこしらえて妻が言うと、のびて行った気持をいきなりねじまげられ、私は視線のやり場を失う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook